HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	あいさつとあいさつ表現の判断基準及び分類に関する考察 ： 日本語の視点をもとに
Author(s)	肖, 潔
Citation	研究論集, 19, 233 (左)-243 (左)
Issue Date	2019-12-20
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.19.l233
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/79798
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_rjgshhs_19_p233-254_l.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgshhs.19.l 233

あいさつとあいさつ表現の判断基準及び分類に関する考察

── 日本語の視点をもとに ──

肖　　潔

要　旨

あいさつは，毎日行われる行為として常に見られるものであるが，人間の会話の中核的な部分ではないため，あまり重要視されてこなかった。先行研究でもあいさつやあいさつ言葉に対して考察されてはいるが，未だ全面的かつ体系的な解釈はなされていないと思われる。本論は，語用論における phatic communion（交感機能）という概念を用いて，あいさつ及びあいさつ表現に対して考察を行い，その判断基準を定めた上で分類することを試みた。「条件」「目的」「形式」「機能」という四つの観点から分析することにより，あいさつは，「同一の共同体または設定中の共同体における人間が，定型性のある表現や仕種を用いて行う交感機能の持つ行為である」という定義を提案する。また，その判断基準をもとに，あいさつ表現及び関連する交感発話に対して幅広く考察し，「交感機能」を持つことを分類の前提として，「定型性」「文体分化」「場面」という三つの側面より分類することを試みた。特に，「あいさつ表現」「準あいさつ表現」「あいさつ以外の関連表現」という大分類も示した。

1　はじめに

われわれは人に出会ったり，人と別れたりする時，常にあいさつをしている。あいさつは毎日行われているが，人間の会話の中において中核的な部分ではないため，メジャーな研究対象として重要視されてこなかった。しかし，このような人の注意を引かないような行為様式はわれわれの日常生活において重要な役割を果たしている。人間としてこの世に生きている限り，人と付き合うことは避けられないだろう。あいさつをしない人は，無礼な人間や世間的なマナーが身に付いていない人であると扱われる。人と付き合う時，よく目的ないし方向を考えな

がら発話を行ったり，行動を取ったりしているが，用件や情報のやりとりを目的にするほかに，人間同士の感情的な交流も不可欠なものであろう。人間は社会的生き物であり，社会的役割を果たす時，人間関係をうまく取り扱うために適切な行為を行うことが必要となる。

あいさつは，まさにこのような見かけでは実質的な意味がないような存在であるが，人間同士の感情交流に大きな役割を果たしている行為様式であると考えられる。しかし，あいさつとは一体何を指すか，あいさつ表現はどのような形式で表されているか，どのような機能を果たしているかということは，これまでに未だ体系的かつ明確な解釈はなされていないと思われる。

2　先行研究

前述の通り，あいさつは人間同士の感情交流に役立つ一種の行為である。語用論的な視点でいうと，このような言語行動は「交感機能」を強く持っているとのことである。「交感機能（phatic communion）は，イギリスの言語学者ファース（J.R. Firth）が人類学者のマリノフスキー（B. Malinowski）に刺激されて導入した概念である。情報内容の伝達よりも，安定的にやりとりできる状況を作ったり保持したりすることに重点のある言語行動が持っている作用を指す」（加藤 2004：112）。そして，「‘phatic communion’ とはギリシア語 phatos（＝spoken）からのマリノフスキーの造語である。仲間意識がそれによって形成され維持されるような言葉のやりとりを指す。情報の交換を目的とするものでなく，沈黙の気まずさを避けるという効用もある。How do you do? Nice day! など phatic communion のうちでも特に決まり文句となったものである」（大束 1978：349）。あいさつとあいさつ表現の実態をはっきりするために，マリノフスキーとファースが記述している phatic communion について確認したい。

2.1　Malinowski（1923）

phatic communion について，マリノフスキーは次の通りに述べている。

> There can be no doubt that we have here a new type of linguistic use - *phatic communion* I am tempted to call it...a type of speech in which ties of union are created by a mere exchange of words.（Malinowski 1923：151）

ここでは言語的使用に新しいタイプを提示しても疑わしくないと考えられる。私はそれを *phatic communion* と呼ぶ。「単に言葉を交わすことによって仲間の絆が作り出されるというような種類の言葉」（大束訳 1978：41）である。

Malinowski（1923）は，上記のように言語の使用において phatic communion という新しいタイプのものがあると述べている。なぜ phatic communion という新しい用語をつけたかというと，

人間の発話は基本的に「場面の脈絡」（context of situation）（Malinowski 1923：149）と緊密なつながりを持ち，目的性のあるものであるが，「自由」（free）で，「目的性なし」（aimless），単なる「社交」（social intercourse）（Malinowski 1923：149）のために使う言葉もあるということである。例えば，村の人が一日中の仕事を終えた後，火の周りに集まって，おしゃべりをしている時の発話は，マリノフスキーはこのように記述している。

> Language here is not dependent upon what happens at that moment, it seems to be even deprived of any context of situation. The meaning of any utterance cannot be connected with the speaker's or hearer's behavior, with the purpose of what they are doing.（Malinowski 1923：149）

この場の言語（発話）はその時点に起きたこととは関係がない。あらゆる場面の脈絡（という要素）でさえもなくなったようである。その場の発話の意味は，話し手と聞き手の行為及び彼らの手元でやっていることの目的とは関連性がないことである。

> Inquiries about health, comments on weather, affirmations of some supremely obvious state of things - all such are exchanged, not in order to inform, not in this case to connect people in action, certainly not in order to express any thought.（Malinowski 1923：149）

健康についての尋ね，天気についてのコメント，物事の極明らかな状態に対して断言するような話題が交わされる。それはお知らせのためではなく，人の行動にもつながらず，何らかの思考（意向）を表わすためのものでもない。

マリノフスキーによれば，そのような発話は「質」を重要視していないということである。間違っていることを言っている可能性もあるが，「話の目的は共同の感情を確立する」（serve the purpose of establishing a common sentiment）（Malinowski 1923：149）ためである。例えば，*How do you do? Ah, here you are. Where do you come from? Nice day today*（Malinowski 1923：150）のようなあいさつの決まり文句がある。

マリノフスキーによると，社交的な言語の機能を議論する時，社会における人類の本質的な基本原則を触れるようになるということである。それは人間が「集まり，互いの付き合いを楽しんでいる」（to congregate, to be together, to enjoy each other's company）傾向があるということである。それによって，言葉もそのような傾向と緊密に関連付けている。一人の「自然人」（natural man）にとって，相手の沈黙や無口は不親切で，性格が悪いと見られることである。「無言な状態を破り，言葉による親しい交流は仲間のつながりを作る第一歩である」（The breaking of silence, the communion of words is the first act to establish links of fellowship）。「現代英語での *Nice day today* 或いはメラネシア語の *whence comest thou?* は，人が互いに無言な状態に直面している時の見慣れなく，不愉快な緊張感を乗り越えるために存在するものである」（The modern

English expression, *Nice day today* or the Melanesian phrase, *whence comest thou?* Are needed to get over the strange and unpleasant tension which men feel when facing each other in silence）ということである。また,「最初の決まり文句の後に，個人の選好や嫌悪のような目的性のない表現，関係性のない出来事の陳述，極明らかなことに関するコメントのような話が続くのである」（After the first formula, there comes a flow of language, purposeless expressions of preference or aversion, accounts of irrelevant happenings, comments on what is perfectly obvious）。（Malinowski 1923：150）

従って，phatic communion の言葉は主に意味を伝達するために用いられるものではないとマリノフスキーは述べている。そのような言葉の「主要な目的は社交的機能を実現するものであり，人の考え（意向）を伝達する手段として機能していないものである」（They fulfil a social function and that is their principal aim... Once again we may say that language does not function here as a means of transmission of thought.）ということである。純粋な社交活動及び「雑談」（gossip）において用いられる言葉は phatic communion である。それは,「単なる仲間づきあいの必要性により，個人団体における絆を確立することに役立つものであり，人の意思を伝達する目的を持っていないものである」（which serves to establish bonds of personal union between people brought together by the mere need of companionship and does not serve any purpose of communicating ideas）とマリノフスキーは述べている。（Malinowski 1923：151）

上記の説明をまとめると，phatic communion は，次の通り主に三つの特徴があると考えられる。Ⅰ発話の意味は，話し手と聞き手の行動目的と関連性がないことである；Ⅱ発話は聞き手へのお知らせではなく，人の行動にもつながらず，人の考えや意向を伝達する機能を持っていない表現である；Ⅲ共同の感情を確立し，沈黙の気まずさを避け，社交的機能を実現することが主要な目的である。また，how do you do のようなあいさつ言葉は phatic communion の機能を持っていることが分かる。

2.2　Firth（1935）

ファースは「場面の脈絡」[1] の中における言語の機能を記述し分類する時に，マリノフスキーの phatic communion について次のように説明を加えている。

---

[1] 「場面の脈絡」（context of situation）は，ファースが意味論の技法を論じる時，マリノフスキーの考えを借りて発展したものである。マリノフスキーは，場面の脈絡を，その中で言語が意味 ── しばしば「創造的な」意味 ── をもつ，一種の行動の「基盤」（matrix）と考えた。実用的なことばにおける「意味」はある場面の脈絡の中の「一つの行動の様式」と考えられている。今取り上げている理論における場面の脈絡は社会的過程の中の典型的な「繰り返し起こる出来事」にとくに適用するための「一つの図式的構築物」（a schematic construct）である（大束訳，1975：214 参照）。ファース（1935）によると，われわれは社会的人間であるため，言語の意味も社会のいろいろな場面と関連付けていることである。「一つの語にとっての脈絡が際限なく増えていくのと同様に，場面もまた無限に多種

Then one might add such types of situation as those in which there is an ‘individual’ or ‘monologue’ use of language, and those in which there is a sort of ‘choric’ use, as when vocal interchange merely promotes or maintains affective rapport. Malinowski has applied to this kind of linguistic behavior the very happy phrase ‘phatic communion’—‘a type of speech in which ties of union are created by a mere exchange of words’.（Firth 1935：30）

それから，「個人的な」すなわち「独白的な」言語の用法が現れるとか，声をかけ合うことが単に感情的な親近感を推進するか維持する場合のように，一種の「合唱的」用法が見られる，というような種類の場面を加えることができよう。マリノフスキーはこの種の言語行動に‘phatic communion’（「団らん」「おしゃべりを通しての交わり」）という非常に適切な句を当てた。これは「単に言葉を交わすことによって仲間の絆が作り出されるというような種類の言葉」である。（大束訳 1978：41）

また，ファースの記述によると，詳しく見るならば，われわれは，次のようなありふれた場面に気づくという。

a　呼びかけ（address）:「シンプソン！」「おい（Look here），ジョーンズ」,「まあ，お前（‘My dear boy’）」「さあ，君（‘Now, my man’）」,「失礼ですが，奥様（‘Excuse me, madam’）」。

b　あいさつ，別れ，あるいはまた，出会った時に互いに相手の地位やお互いの間柄を認めること，出会いの後の間柄の調整，交際の断絶，旧交を温めること，間柄の変化。（略）

（Firth 1935：30，大束訳 1978：42）

上記の先行研究によると，phatic communion は情報の交換を目的にするものではなく，言葉を交わすことによって，感情的な親近感を推進するか維持するかのような言葉のやり取りを指すものであるということが明らかになった。あいさつは phatic communion の一つの実現形ともいえるだろう。

3　あいさつとあいさつ表現の定義と基準について

先行研究でまとめた通り，あいさつは phatic communion の一種の実現形であることが分かった。ここでは，phatic communion を「交感機能の持つ社交的言葉」と訳しておく。さて，あいさ

多様であることは事実である」（大束訳 1978：39 参照）。また，人間の社会的役割には相応しい科白を持たれている。どの場面においてどの科白を使うか，何を話すかもはや決まっていることである。それによって，場面的ならびに言語のいろいろなカテゴリは分類して記述できるということである。

つとは何なのかというと，本論では，先行研究をもとにして，あいさつが存在する「条件」「目的」「形式」「機能」という四つの観点から分析し，次のように定義をつけることを試みる。

「あいさつ」とは，同一の共同体（community）にいる人または共同体を設定しようとしている人が，情報の交換を目的にせず，親和的な仲間意識を維持したり形成したりするために，定型的な表現や決まった仕種を用いて行う，社交的な行為の一つである。要するに，あいさつは交感機能の持つ行為である。あいさつというのは，必ずしも言葉を交わすとは限らない。出会いの人に対して頭を下げたり，手を振ったり，お辞儀をしたりするだけでもあいさつになるだろう。あいさつは一種の行為であり，あいさつをする時に用いられる言葉は「あいさつ表現」である。次に，具体的な論述をする。

3.1　あいさつの条件

条件とは，あいさつが存在する前提ということである。あいさつをする人間同士には通常二種類があると考えられる。一つは同一の共同体に存在している人間であり，もう一つは同一の共同体を設定する意向がある人間である。その共同体の具体的なイメージとしては，家庭，学校，会社，教会などのように人間がいろいろな社会的役割を果たすために形成された集団であると理解してもよいだろう。それによって，家族関係，同窓関係，師弟関係，同僚関係，信者仲間関係などのような相互関係が形成される。それぞれの相互関係において，人間同士が互いに知り合っている。つまり，同一の共同体において互いの社会身分をもとに知り合っている人，またはそのような共同体における相互関係を作ろうしている人の間にのみあいさつが行われる可能性がある。しかも，それが前提条件であると考えられる。

例えば，われわれは道で知り合いに出会った時，あいさつが行われる。誰かの紹介によって初対面の人に会った時もあいさつが行われる。しかし，普段会ったこともない見知らぬ人，かつ前述のような相互関係を構築する意向もない人には，通常あいさつを行わないであろう。そのような現象によって，「同一の共同体にいる人間同士やそのような共同体における相互関係を構築しようとする人間同士には，あいさつが行われる」という前提条件をつける必要があると考えられる。

3.2　あいさつの目的

あいさつが存在する条件は前述の通りに述べたが，なぜ同一の共同体または共同体を設定しようとする人間同士はあいさつをするかというと，あいさつの目的という話を話題に取り上げると考えられる。その目的とは，親和的な仲間意識を形成したり，維持したりするために行われることである。われわれは，社会的人間であり，一つの共同体において社会的な役割を果たす時，人間関係を良好に維持したり形成したりする必要があるだろう。あいさつはまさにこのような人間関係を円滑にし，社交目的のための交流として存在するものであるといえる。道で

知り合いに出会った時，相手のことを無視して黙って通り過ぎるのではなく，「こんにちは」，「hello」，「你好」を用いて簡単にあいさつをする。それによって，相手との関係を改めて確認でき，親和的な仲間意識が存続できるようになる。初対面の人に対しても，そのような良好的な人間関係を形成しようと考える上で，あいさつをするようになっている。それは，Malinowski（1923：150）が述べているように，「一人の自然人にとって，ほかの人の沈黙は人に安心感を与えられない。それどころか，何か不安で危険の雰囲気が生じる。あらゆる未開な部族民にとっても，言葉を話せない見知らぬ人は天敵である」（to a natural man, another man's silence is not a reassuring factor, but, on the contrary, something alarming and dangerous. The stranger who cannot speak the language is to all savages tribesmen a natural enemy）ということである。要するに，あいさつをする人間同士は，共同体における相互関係を安定的に構築するという社交目的を持っていることである。

よって，あいさつは決して他人の機嫌を損ねるために存在するものではない。言葉が用いられなくても，会釈をしたり，ほほえんだり，手を振ったりすることによって，相手に自分の気持ちを伝える。そのようなあいさつの仕種は言葉と同じように，「実践的な効能」[2]（pragmatic efficiency）（Firth 1935：30，大束訳 1978：42）を持っているのである。何を言っても，あいさつせず沈黙をしている人は不親切であり，悪い人柄として扱われることにつながる。従って，あいさつはそう思われないように存在するものであるといえる。

3.3　あいさつの形式

前節は，主にあいさつが存在する前提条件とその目的を述べたが，次はあいさつの形式と機能を分析する。形式とは，定型的な表現や決まった仕種を持っていることである。あいさつの形式において，定型性があるのは最も顕著な特徴であろう。前述のように，人にあいさつをする時，主に言葉を用いるか，身体動作であいさつをするかという二種類の形式がある。もちろん，この両方が同時に行われることもよく見られる。そのうち，言葉を用いるあいさつ表現は，「おはよう」，「こんにちは」，「さようなら」などのようなありふれたものがある。また，あいさつの身体動作にも決まった仕種がある。それは，同一の共同体において，頭を軽くうなずいたり，手を振ったり，お辞儀をしたりするように，あいさつの意味を持つと共同に認められる身体動作のことである。

---

[2] Firth（1935）によると，「その実践的効能」はマリノフスキーが提示された言葉である。「マリノフスキーは声をかけ合うことが目下従事している仕事，たとえば，漁や狩やトラックの荷積みや，道具や材料を共同で扱うような仕事の，まさに一部をなすような，特に興味深い場面を強調している。彼はそのような語の意味とは『その実践的効能』であると言っている。掲示や案内標識などに見られる現代の「目言語」（eye-language）の大部分はこの種のものである」（Firth 1935：30．大東訳 1978：42）。本論では，その言葉を転用した。

人間社会の発展につれて，あいさつに用いられる言葉と身体動作も決まり文句のように，紋切り型のものになっている。それは，ファースが紋切り型の言語形式を生み出す傾向にある新聞の書評執筆者の専門語のことを，「このことは，そのような書評が無意味になったということではなく，むしろ，かなり単純な一組の決まり文句的表現が実際には便利だということを意味しているのである」（This does not mean that such reviews are become meaningless, but rather that a fairly simple set of stock indications are practically convenient.）（Firth 1935：31，大束訳 1978：43）と述べているように，あいさつも決まり文句的なものになったことにより，かなり便利に用いられるようになったと理解してもよいだろう。その決まり文句的な表現を「定型表現」ともいう。

3.4　あいさつの機能

次は，あいさつ，特にあいさつ表現の機能から分析してみる。前述の通り，あいさつは phatic communion の一つの実現形であるため，交感機能を持つことはあいさつの主な特徴として認められる。社交目的を重要視しているため，発話の情報性が低く，行動意図に目的性が少ないことはその特徴である。日常言語学派の流れをくむ哲学者グライス[3] は，会話のやりとりでは参加者が協調的な態度で相互に協力しあうことで会話を構築すると考えた。彼は，会話の参加者は「会話のそれぞれの段階で，その時の会話の目的ないし方向から要求されるように，貢献せよ」という協調の原則に従うとし，Ⅰ量，Ⅱ質，Ⅲ関連性，Ⅳ方法という四つの格率に分けられている。そのうち，量の格率とは，情報の量について「過不足なく適切な量の情報を提供せよ」ということである。つまり，人との会話において，何かの目的ないし方向をもって相手に適切な情報量を教えることが特徴の一つとして存在している。しかし，あいさつには，そのような内容の情報性が低いかもしくはないということである。あいさつは，そのような中核的な部分の会話の議論に当てはまらず，人間同士の良好なコミュニケーション環境が形成できるように基盤を作り，前もって会話の交流条件を整えるものであるといえるだろう。

例えば，「こんにちは」はもともと，「今日（こんにち）はご機嫌いかがですか」「今日はよいお天気ですね」などの表現の後半が略され，昼間に人に会った時のあいさつとして定着したものである。「おはよう」も朝，自分より先に出ていた人に対して，「お早いですね（お元気で何よりです）」という意味を込めて「お早う（おはよう）お越しで」などと声をかけていたのが始まりとされるものである。このように，以前は定型性の低いものであろうと，現在のような定型性の高いあいさつ表現であろうと，その内容は実質的な意味や情報が伝達されていないと考えられる。むしろ，実質的に伝達できる情報がないからこそ，実用的な便利性を考えた上で，次第に定型性の高い表現になったともいえるだろう。また，表現の定型性が高ければ高いほど，

[3] 加藤（2004：52-57）参照。

情報性がないと考えられる。

定型性が低い表現でも情報性が少ないことについては，次のような例を引き続き見ていただきたい。

（1）朝，早く起きた人に対して次のように言うことがある。

── 早いね/早起きだね。

これは，Malinowski（1923：150）が述べているように，「極明白なことにコメントする」（comments on what is perfectly obvious）ものであろう。相手が早く起きたことは会話参加者（話し手と聞き手）にとって，それは既に分かり切ったことであるため，「早いね」「早起きだね」は相手に何か情報を伝達するためではなく，相手のことを無視せず感情的な交流目的をもとに話しかけているものである。また，次のような例もある。

（2）人と別れる時，再会を約束するような言葉。

── また会いましょう。　（甲斐 1984：190）

これは，友人と別れる時によく用いられる言葉であろう。このような言葉は，むしろ Firth（1935：28）が言っている「科白（せりふ）」（line）のようなものに当てはまると考えられる。実質的な意味はなく，会話参加者の「役割」（role）をもとに，その場面と関係していることを言っているだけである。なぜかというと，「また会いましょう」はいつ会うか，どこで会うかなどはまったく不明な言葉である。また，今後は実際に会えるかどうかも分からない。このような曖昧な話は，相手に実質的な情報を伝達していないといえる。ただし，情報性が低く，一見して虚偽の話のようなものであるが，この言葉は全く無意味だとはいえない。それは，「また会いたい」「あなたとの関係を引き続き保ちたい」「私のことを忘れないでね」という話し手の潜在的な気持ちが伝えられているからである。従って，このような表現は実質的な情報交換というより，人間関係を円滑に保つために用いられる感情的な交流表現である。これはまさにあいさつ表現に当てはまるものといえるだろう。

情報性が低いほかに，人の行動につながる目的性が弱いという要素も考慮する必要がある。典型的なあいさつ表現は情報性がかなり低く，ゴシップ（gossip）のように，会話参加者にとって極明瞭な話についてコメントをしたり，当たり障りのない話をしたり，実質的な行動につなげない話題を話すことによって，互いの感情交流に役立つ交感発話である。時刻によるあいさつ言葉であろうと，天候や人の健康話題にかかわるようなあいさつ表現であろうと，どちらも人の行動意図につながる可能性の低い言語表現である。従って，あいさつ及びあいさつ表現の機能は「社交性があること」「情報性が低いこと」「目的性が弱いこと」という三つの観点より

考えた方がよいであろう。

これまでの「条件」「目的」「形式」「機能」を分析した結果，あいさつの大まかな範囲が決められると考えられる。あいさつには，この四つの判断基準を備えなければならない。しかも，この四つの基準はそれぞれ独立したものではなく，相互に補い合い，緊密な関連性を持っているパートナーの関係のものであると認識している。また，社交性のある，情報性と目的性の少ない発話を用いることによって，仲間意識を維持したり形成したりすることは交感機能の持つことを指しているので，あいさつの定義を改めてまとめると，「同一の共同体または設定中の共同体における人間が，定型性のある表現や仕種を用いて行う交感機能の持つ行為である」といえるだろう。

4　あいさつ表現の分類方針と分類について

前述のあいさつの定義に基づいて，あいさつ表現は形式的に定型性があり，機能的に交感機能を持つ言語様式であることが明らかになった。その本質は，会話をする時に，人間関係を良好にするコミュニケーションの基盤を立てることである。ただし，あいさつ表現を具体的にどのようにイメージすればよいかは未だ不明である。次に，あいさつ表現の構造をよりよく把握するために，あいさつ表現に対して分類することを試みる。

4.1　分類方針

あいさつ表現がどのような言語様式なのかを解明するために，あいさつ表現に対してのみならず，あいさつと関連づけられる表現なども含めて幅広く考察する必要があると考えられる。あいさつ表現というと，「条件」「目的」「形式」「機能」という四つの判断基準があり，そのうち，最も重要な基準は機能のことである。前述の通り，あいさつ及びあいさつ表現は「社交性がある」「情報性が低い」「目的性が弱い」という三つの交感機能の特徴を持つことが明らかになった。よって，あいさつ表現を分類する前に，まずはその三つの機能特徴より考察し，あいさつ表現の大まかな範囲を決定するする必要があると考えられる。

その上，「定型性がある」ということも顕著な形式的基準であるため，「定型性」の程度をもとに分類する。具体的にいうと，定型性のうち，定型性の高いものと低いものがあると見られる。その他，交感機能の特徴を持っているが，定型性がない表現もある。また，形式というと，日本語の言語特徴に影響され，あいさつ表現には「スタイル分化/文体分化」という要素も関わってくるため，「文体分化」による分類も考えられる。文体分化は定型性の程度とも関わっている。日本語でよく見られるのは「です・ます」という丁寧形がつく文体とそうではない普通形の文体のことである。また，丁重さの度合いにより，「です・ます」形を「ございます」などにする時もある。さらに，さまざまな会話場面において，用いられるあいさつ表現も異なってくるた

め,「場面」による分類も考えられる。会話場面について，初対面の時，人と出会いや別れの時，特定の活動場面の時などいろいろある。あいさつは基本的にそのような会話の開始部ならびに終了部に現れると認識している。それに基づいてあいさつ表現を考察する上で，他の関連場面の現象も考慮に入れて整理したいと考える。本節は，それらの特徴を手がかりにして，あいさつ表現及びその関連現象に対して考察し,「定型性」「文体分化」「場面」という三つの側面より分類することを試みる。

4.2　交感機能による分類前提

前述の通り，交感機能を持つことをあいさつ表現の最も重要な判断基準として認めた上で，次の分類を策定する方針を決めた。よって，あいさつ表現ならびにそれ以外の関連表現を考察する時,「社交性がある」「情報性が低い」「目的性が弱い」という三つの交感機能の特徴に基づいて整理した。その結果，次のような分け方があると考えられる。

（3）Ⅰ　社交性がある・情報性が低い・目的性が弱い表現
　　Ⅱ　社交性がある・情報性が低い・目的性が強い表現

上記（3）Ⅰは，交感機能の三つの特徴を揃えている典型的な「交感発話」である。（3）Ⅱは,「目的性が強い」という話し手の使用意図があり，人の行動につなげる目的がある特徴が含まれている。この種類は典型的な交感発話ではないが,広い意味での交感発話ともいえるであろう。（3）をもとに，次のような分類を継続的に記述する。

4.3　定型性による分類

上記交感発話における二種類の分類前提を考えた上で，あいさつ表現の定型性という特徴と合わせて分類することを試みる。本論では,（3）Ⅰのような三つの機能特徴を揃えているもの，かつ定型性のある表現を「あいさつ表現」として扱う。そして，定型性の程度により，定型性の高い表現を「あいさつ言葉」，定型性の低い表現をそれ以外のあいさつ表現というように小分けする。（3）Ⅱのような人間関係の活動に貢献しているが，行動意図に目的性が強いため，交感機能の本質とは若干異なるもの，同じく定型性のある表現を「準あいさつ表現」として扱う。また，（3）Ⅰの典型的な交感機能を持つもの，定型性のない表現を「あいさつ以外の関連表現」として扱うようにする。これを図1のようにまとめる。

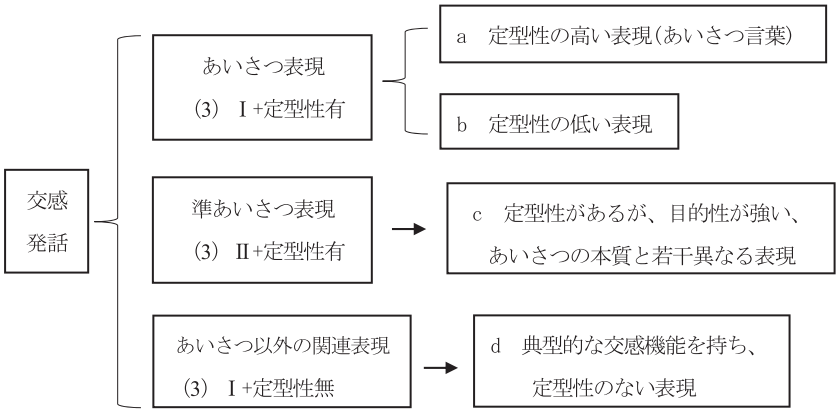

図 1　あいさつに関わる表現の分類

あいさつ表現のうち,「a 定型性の高い表現」は次のような典型的な例がある[4]。

（4）人に出会った時
　　── おはようございます。
　　── こんにちは。
　　── こんばんは。

（5）人と別れる時
　　── さようなら。
　　── お先に失礼します。

（6）寝る前
　　── お休みなさい。

（7）食事をする時
　　──（食べる前）いただきます。
　　──（食べた後）ご馳走様でした。

（8）家の出入りをする時
　　──（自分が外出する）いってきます。

[4] 例は甲斐（1984：190）を参照した上で付け加えているものである。

――（家族を見送る）いってらっしゃい。
――（自分が帰宅する）ただいま（帰りました）。
――（家族が帰宅する）お帰りなさい。

（9）他家を訪ねた時
――（訪問する時）ごめんください。
――（辞去する時）お邪魔しました。

上記のように，さまざまな場面において，定型性の高いあいさつ表現が現れることが見られる。また，前節でも述べたように，定型性の高い表現は，本来の表現と意味をもって現在の決まった言い方に省略したものである。例えば，（4）の「おはよう」「こんにちは」のほかに，（5）の「さようなら」も「然様（さよう）ならば（そういうことならば）」に続く，「お別れですね」「ご機嫌よろしく」などのような言葉が略され，さらに「ば」もとれ，「さようなら」の形に定着したとのことである。（9）の「ごめんください」も本来は「ごめんなさい」と同じく，謝罪の表現であった。人の家を訪ねる時，約束をしていないのに，突然来たことなので，「ごめんなさい」の意味を込めて謝罪をするという趣旨である。現在は，人の家を訪ねる時に用いられる科白として定着した。これらの表現は定着したことによって，情報性の低いあいさつ言葉になったともいえるだろう。

（10）天候や気候の話をする
―― いいお天気ですね。
―― お寒くなりました。

（11）健康の尋ねや評価
―― お元気ですか。
―― お元気そうですね。

（12）路上での出会い
―― お出かけですか。

（13）（別れる時）人への励ましなど
―― 頑張ってください。
―― 応援します。
―― お気をつけて。

(14) 出世・成長の評価

── ご活躍のようですね。

── 息子さんは大きくなりましたね。

(10)～(14)を，あいさつの基準に満たし，「b 定型性の低い表現」として扱うと考える。定型性の低い表現は常にあいさつの時に，「こんにちは」「はじめまして」のような定型表現の後に用いられるようになっている。また，定型性の低い表現のもう一つの特徴は，定型性の高い表現（定型表現）のかわりに現れることがあるということである。例えば，(12)の路上での出会いにおいて，話し手は「こんにちは」とあいさつをしてもいいし，「こんにちは」を略して「お出かけですか」と直接声をかけるのもよく見られることである。ただし，話し手と聞き手の関係が遠い場合または目上と目下の関係場面において，定型表現の「こんにちは」であいさつをすることは一般的であろう。両者の関係が近い場合または職務などの上下関係が関わっていない場合は，「お出かけですか」のような定型性の低いあいさつ表現のみであいさつすることもよく見られるだろう。さらに，定型性の低い表現には，よく「天気」「相手の安否に関わる健康や成長の尋ねと評価」など当たり障りのない，相手に関心を示しているような話題が現れる。

(15) 感謝

── ありがとうございます。

── 恐れ入ります。

(16) 謝罪

── すみません。

── ごめんなさい。

── 申し訳ございません。

(17) 依頼

── よろしく。

──（よろしく）お願いします。

(18) 慰労

── お疲れ様です。

── ご苦労様です。

(15)～(18)は，あいさつの性質と似ているが，あいさつの典型とはやや異なるもので，本論

では「準あいさつ表現」と定めた例である。準あいさつ表現としての主な判断基準は，「行動意図に関わるかどうか」のことである。「感謝」「謝罪」「依頼」「慰労」などの場合，話し手の行動意図が強いと考えられる。これらの表現は人との不均衡な人間関係を調節したり，修復したりするために用いられるものである。「感謝」「謝罪」は主に相手への負い目があると思った上に行われる言語行動である。「依頼」は相手から助力を得たい時，「慰労」は相手の労働業績を認めることによって，今後の更なる貢献を期待する時によく行われる行動である。このような言語行動は，話し手の行動目的を込めて，発話内行為と関わることがあると考えられる。

表現自体は情報性も低く，人間関係を維持することにも役立ち，定型性のあるあいさつ表現と近似している。しかし，典型的なあいさつ表現は，発話の目的性が非常に弱く，当たり障りのない話をすることによって，相手と感情的な交流を実現するものである。そのため，これらの表現は準あいさつ表現として扱われる。

(19) 呼びかけ

── あのう/ちょっと

──（固有名詞＋敬称）山田さん。

──（肩書・職位）佐藤部長/加藤先生。

──（対称詞）あなた方。

なお，(19)のような呼びかけの表現は「あいさつ以外の関連表現」として扱うことを考えている。あいさつをする時に，相手に敬意を込めて呼びかけることによって，親和的な気持ちを伝えていることがあるが，表現には定型性がないため，あいさつの範囲に含まないと考えられる。このような表現は交感機能を持つ表現であるため，あいさつともよく共起するもので，あいさつ以外の交感発話として扱うこととする。

4.4 文体分化による分類

あいさつ表現には，定型性があるほかに，文体分化の現象も関わってくる。日本語の場合では，「です」「ます」「ございます」などがあるかどうかのことである。前述の例をもとに，下記のように記述する。

(20) 定型性の高い表現において

・あいさつ表現であり，文体分化ができる表現

── おはよう/おはようございます。

── おやすみ/お休みなさい。

── お久しぶり/お久しぶりです。

――（食事後）ご馳走さん/ご馳走さま/ご馳走さまでした。
――（家族が帰宅する時）おかえり/お帰りなさい。

・準あいさつ表現であり，文体分化ができる表現
――（依頼）おねがい/お願いします/よろしくお願いします。
――（感謝）ありがとう/ありがとうございます。
――（謝罪）すまない/すみません。
　　ごめん/ごめんなさい。
　　申し訳ない/申し訳ありません/申し訳ございません。
　　失礼/失礼しました/失礼いたしました。
――（慰労）ご苦労さん/ご苦労さま/ご苦労様でした。
　　お疲れ/お疲れさん/お疲れさま/お疲れ様です。

・あいさつ表現であり，文体分化ができない表現
―― こんにちは。
―― こんばんは。
―― さようなら。
――（食事前）いただきます。
―― 行ってきます。
―― 行ってらっしゃい。
――（他家を訪問する時）ごめんください。
――（他家を辞去する時）お邪魔しました。

(21) 定型性の低い表現において
―― いいお天気だね/いいお天気ですね。
―― また会おう/また会いましょう。
―― 元気？/お元気ですか。
―― お大事に/お大事になさい。

あいさつ表現の定型性と関わり，文体分化ができる現象とできない現象も見られる。(20)～(21)に記述している通り，定型性の高い表現は文体分化ができる表現とできない表現の二種類に分けられているが，定型性の低い表現はほとんど文によって構成されているため，文体を選べると見られる。また，文体分化ができる表現には，「です・ます」は「ございます」などのようにかなり丁寧な形や尊敬表現にすることによって，文体を調整することが見られる。例えば，

「申し訳ないです→申し訳ございません」「お願いします→お願い申し上げます」などはその例である。ただし，定型性の高い表現（定型表現）には，「ウ音便」の影響により，「です」を用いるか，「ございます」を用いるかのように，どちらか片方のみが選択できることも見られる。例えば，「おはようございます」は言うが，「おはようです」はあまり言わない。「ご馳走様でした」は言うが，「ご馳走様でございました」も極まれに見られるものであろう。その他，「なさい」という命令形をつけることによって，丁重さの高い表現に調整することも見られる。例えば，「おやすみ→お休みなさい」「おかえり→お帰りなさい」という表現は，目上の人に言う時，省略がない「お休みなさい」「お帰りなさい」という言い方が多いであろう。また，文体分化ができない表現は定型性のもっとも高い表現であり，決まった形として定着したため，「短め，簡潔さ」という特徴が見られる。

4.5　場面による分類

定型性と文体分化の分類のほかに，前述に掲げた例よりも見られるように，あいさつ表現は場面とも関わっていることが分かる。あいさつの典型的な場面は主に会話の開始部と終了部に現れるが，準あいさつ表現の「感謝」「謝罪」などのように会話の開始部や終了部と関係せず，発話行為に関わるものもある。あいさつの場面による分類に関して，先行研究では甲斐（1987：132）の分類がある。

Ⅰ　出会い・別れのあいさつ
　1　路上などでの出会い・別れ
　2　自家の出入り・見送り
　3　他家の訪問・辞去
　4　起床・就寝
Ⅱ　受容・感謝・祝福等
　5　仕事の依頼・感謝
　6　食事の接待・感謝
　7　安否の尋問・祝福
　8　慰安・激励・弔問等

上記の甲斐（1987）の分類を参照する上で，次の要素も考慮に入れて，今後の議論の準備段階として記述しておく。まずは，あいさつ表現は会話の開始部と終了部に現れるほかに，開始部と終了部の位置に関係なく用いられる場合もある。例えば，「こんにちは」「おはよう」などは会話開始部のあいさつ表現であり，「さようなら」「失礼します」「また明日」は主に会話終了部のあいさつ表現である。その他，「どうも」「こちらこそ」などは会話の開始部に位置するか，

終了部に位置するかという明瞭な基準線が見られない。また，会話の開始部や終了部に関わるということより，人の行動の開始部や終了部に関わるといった方が適切な場合もある。例えば，食事をする時，食べる前の「いただきます」と食べた後の「ご馳走様でした」；家の出入りをする時，外出前の「行ってきます」と帰宅後の「ただいま」はそれぞれ人の行動の開始部と終了部に関わる場面である。

次に，あいさつ表現の用い方は人間同士の親疎関係に関わることである。例えば，初対面の場合，人の関係が遠いことが一般的であるため，定型性の高い表現が多く用いられる。相手とは知り合いの場合，関係が近いほうなので，定型性の低い表現がかわりに多く用いられるであろう。例えば，「頑張って」というような表現は，最近別れる時に「さようなら」のかわりに用いられるようになっている。それは，相手が学問でも仕事でも何かを目指しているような場合に，努力してうまくいくようにと相手を励ましたりする表現である。このような表現は初対面の時に用いられないと考えられる。そうすると，人間同士の親疎関係により，用いられるあいさつ表現も異なってくることが分かる。場面と定型表現の関係がある程度決まっているのではないかと想像される[5]。

さらに，あいさつ表現にも話し言葉（口語）と書き言葉（文語）の違いもあると考えられる。これまでは主に話し言葉を中心に論じてきたが，書き言葉の場合，よく見られるのは手紙や電子メールにおけるあいさつ表現のことであろう。例えば，手紙には，最初に「拝啓」「前略」，最後に「敬具」「草々」という決まり文句が用いられる書き方が決まっている。また，電子メールには，事務の方が連絡してくる時，「いつもお世話になっております」とメールの最初に書き，最後は「よろしくお願い致します」とのような言い方で締めくくることが見られる。このように，書き言葉におけるあいさつ表現は比較的に定型化が進んでいることが明らかになる。ただし，友人同士の場合では，話し言葉のあいさつ表現が用いられる電子メールも見られる。それは具体的な例をもとに考察する必要がある。

最後に，前述したように，あいさつの性質と近似している準あいさつ表現の関係話題及びあいさつと共起する関連現象もそれぞれ場面の一つとして分類できると考えられる。特に，後者は会話の構成に関して議論する時，常にあいさつと関連付けて現れる部分である。われわれは，社会的対人関係における人間関係を良好にするために，会話を進める時に，あいさつ表現を用いる他に，それと関連している交感発話も共起するのである。例えば，学会で発表する人が人前であいさつをする時，「今回はこのような立派な研究会で，私のような者が発表することができて……」という自己卑下で，謙遜な言い方をすることがある。また，本論の話に入る前に，聞き手の関心や注意を引き付けるために，自己紹介をしたり，話の背景や目的を事前に説明したりすることもある。これらは，典型的なあいさつではないが，あいさつと共起する関連表現

[5] 本論は，主に日本の東京方言をもとに考察している。

として取り上げられるべきと考えられる。

本論は，上記の要素を考慮に入れ，あいさつ表現の場面による分類を次のようにまとめる。

(22) Ⅰ　口語あいさつ表現

① 会話（行動）の開始部

定型性の高いあいさつ表現

・ 路上などでの出会い

・ 自家の出入り

・ 他家の訪問など

定型性の低いあいさつ表現（関係話題について）

・天気・健康・食べ物の好き嫌いなど

② 会話（行動）の終了部

・路上などでの別れ

・自家の見送り

・他家の辞去など

③ 開始部や終了部に特定しない場面

・会話中の応答型あいさつなど

Ⅱ　文語あいさつ表現

手紙や電子メールの開始部と終了部における定型表現など

Ⅲ　準あいさつ表現の関係場面

① 依頼

② 感謝

③ 謝罪

④ 慰労

⑤ 祝福など

Ⅳ　あいさつ以外の関連現象

① 呼びかけ

② 自己卑下

③ 自己紹介

④ 話の前置きなど

5　おわりに

本論は，phatic communion（交感機能）という概念を用いて，あいさつとあいさつ表現を分析

することにより，その定義・基準・分類方針・分類を定めた。あいさつの条件，目的，形式，機能という四つの基準を考察することにより，あいさつの定義を「同一の共同体または設定中の共同体における人間が，定型性のある表現や仕種を用いて行う交感機能の持つ行為である」と決めた。あいさつをする時に用いられる言葉は「あいさつ表現」である。この考察によって，あいさつとあいさつ表現は「交感機能がある」「定型性がある」という特徴を持っていることが明らかになった。また，あいさつ表現の構造をよりよく把握するために，あいさつ表現とあいさつ以外の関連現象に対して幅広く考察し，「交感機能」による分類を前提とした上で，「定型性」「文体分化」「場面」という三つの側面よりあいさつ表現を分類することを試みた。特に，定型性という分類方針より，「あいさつ表現」「準あいさつ表現」「あいさつ以外の関連表現」という三つの分類を定めた。それにより，あいさつとあいさつ表現の本質を見抜けることができた。

本論はあいさつとあいさつ表現に関する初段階の考察であり，今後のさらなる深い議論に進めるための基盤研究である。次は，あいさつとあいさつ表現の基準をもとに，各々の場面におけるあいさつ表現及び関連している交感発話に関する考察を深めていきたいと考えている。

（しょう　けつ・人文学専攻）

参考文献

和文

伊藤雅光（1999）「電子メール通信のあいさつ言葉」『国文学　解釈と教材の研究』44(6)，pp.90-97　東京：学燈社

大東百合子（1975）『ファース言語論集Ⅱ 1952-59』F.R. Palmer 編，大東百合子訳，東京：研究社

――――（1978）『ファース言語論集Ⅰ 1934-51』J.R. Firth 著，大東百合子訳，東京：研究社

甲斐睦郎（1984）「現代日本語のあいさつ言葉について」『国語国文学報』42，pp.177-190 愛知県：愛知教育大学国語国文学研究室

――――（1987）「日本語のあいさつ言葉の構造―昭和二十年代後半の「川のある下町の話」を例にして―」『国語国文学報』44，pp.131-140 愛知県：愛知教育大学国語国文学研究室

加藤重広（2004）『日本語語用論のしくみ』東京：研究社

坂本恵（1999）「待遇表現としての『あいさつ』」『日本語研究と日本語教育』森田良行教授古稀記念論文集刊行会編，pp.234-246 東京：明治書院

滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』東京：研究社

――――（2013）『日本語は親しさを伝えられるか』東京：岩波書店

前田広幸（1990）「あいさつ言葉『お＋動詞連用形』の働き―命令法系統のものを中心に」『女子大文学国文篇』41，pp.57-77 大阪：大阪女子大学国文学研究室

森山卓郎（1999）「お礼とお詫び―関係修復のシステムとして」『国文学　解釈と教材の研究』44(6)，pp.78-82　東京：学燈社

欧文

B. Malinowski（1923）Phatic Communion. *Communication in Face to Face Interaction*, *Selected Readings*. Edited by John Laver and Sandy Hutcheson, 1972. pp.146−152, Great Britain: Penguin Books

J.R. Firth（1935）The Technique of Semantics. *Papers in Linguistics 1934−1951*, 1957. pp.7−33 London: Oxford University Press